

Title	歐米觀察 過去より現代へ(三浦周行著, 内外出版株式会社發行)
Sub Title	
Author	宮島, 貞亮(Miyajima, Teisuke)
Publisher	三田史学会
Publication year	1927
Jtitle	史学 Vol.6, No.2 (1927. 5) ,p.156(308)- 158(310)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	書評
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19270500-0156

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

とを希望してやまない。(松本芳夫)

歐米過去より現代へ (三浦周行著)
内外出版株式會社發行

本書は其のはしがきに「去る大正十一年の春から年の暮にかけて、世界大戦後の歐米諸大學の史學の研究及び教授の状況に併せて、大戦の國家社會に及ぼした影響觀察の目的を以て、歐米諸國を巡遊したのは私の一生忘れ難い感銘である。此旅行に於て、私はつとめて我學すべき彼の長所を把握しやうと努力した。

其豫期の收穫があつたか、なかつたかは、私から言ふべきことではないが、少くとも私自身は、其前後に依つて、研究の態度や表現の方法に、多少の變化を來した自覺を有つことを告白し得るのである」云々と云はれてゐる如く、博士の透徹した史觀と、該博な史識に基く歐米見聞録である。世にありふれた見聞録と同視することは出來ぬ。ひとたび巻を繙かんか、われらは其の學究的な論旨と、ユーモアに満ちた筆致とに魅されるであらう。

本書に收むる目次は、「歐米の史風」、「史學研究室」、「古文書館」、「博物館」、「史的遺物の保存」、「地方史會」、「史學専門雜誌の經營」、「大學の夏期講演」、「大學教授及び學生々活」、「ケンブリッヂでの日記から」、「セーフアー教授と故アダムス教授」、「ムツソリーニ氏と語る」、「スパイ」、「書肆」、「國民的信仰」等である。此の中「歐米の史風」、「史學研究室」、「古文書館」、「セーフアー教授と故アダムス教授」等は博士の卓見を窺ふことの出来る有益な記事であるが、已に「史林」に發表されてゐるからして、其の内容の紹介は、遺

憾ながら、こゝには省くことにし、他の紹介に移る。

「博物館」に於て、博士は「彼れにあつては我帝室博物館に相當する王室立のものゝ外、國立、州立、市立、學校附屬、私人團體立、個人立等其種類が頗る多くて、一國に幾百とある上に、縦し博物館の名はなくとも、各種の常設陳列室で小博物館の實質を備へたものは數限りもないが、我れにあつてはそれが、比較にもならぬ程の少數である外に、其建物といひ、内容といひ、亦頗る貧弱であり、且つ其所藏品に對する研究も、其研究結果の發表も取立て、言ふ程のものが無いのは遺憾である」と喝破され、次で歐米の博物館を紹介され、最後に博物館の興廢は國民精神の消長と關係するところ多大であるから、帝室博物館以外に國立の博物館や畫廊が中央及び地方を通じて、我國に多く設立さるゝに至らんことを切に望んでをられる。

「史的遺物の保存」に於て、「抑歐洲に於ける史的遺物の保存は由來するところが久しいけれども、其眞に學術的手段方法の講ぜらるゝに至つたのは十九世紀に入つてからの事であつて、而かも佛蘭西が實に其先鞭を着けて居るのである。此世紀の初頭に復古的機運が動き出してギクトル・ユーゴー等が盛んにこれを鼓吹し、千八百三十七年には内務大臣ギゾー氏の訓令に依つて史蹟遺物の等級別即ちクラッセマン(Classement)に關する事が定められた。其後程なく此細い號級別は廢されて、只クラッセ・モンニュン(Classe Monument)と、ノン・クラッセ・モンニュン(Nonclassé Monument)との二つに別けることゝなつた」と云はれ、佛蘭西は文化の程度が高く且つ其淵源も古い丈に、佛蘭西は史的遺物の保存に

關し、歐米の何れの國に對しても、一日の長があるやうに思はるゝとの理由の下に、博士は専ら同國の史的遺物保存の機關及び方法等に言及されてゐる。

「地方史會」に於て、「歐米へ行つて私の美しく感じた事の一つは、中央と共に地方史の編纂がよく行届いて居り、分けても地方史料の出版されてゐるものが多いといふことである。英吉利でも獨逸でもこれには到る處で敬服させられたのであるが、亞米利加で私の通過した各地の「ローカル・ヒストリカル・ソサイチー」も亦感激の一つであつた。此種の會は亞米利加の各縣各都市に設けられてあるが、就中マツサチューセツツ、ニューヨーク、シカゴ、ウイコンシンのヒストリカル・ソサイチー、ペンシルニアのアメリカン・コロニアル・ソサイチー杯は、最も有力のものと看做されて居る。是等は何れも雜誌の公刊、集會、陳列等、種々の事業に活動を續けてゐる。「中略」歴史がないといはれる亞米利加に此くの如く各州、各都市に歴史の會があるに拘らず、歴史を尊重するといはれる日本に却つてそれが無いのは、思へば奇怪なコントラストであるまいか」と博士はいはれてゐる。赤坂の辨慶橋附近の堀を平氣で埋めやうといふ國民がある間は、そふいふことを望む方が無理かもしれぬ。

「史學専門雜誌の經營」に於ては、歐米に於ける各種の史學雜誌の發達、經營を説かれ、「大學の夏期講演」に於ては、此種の講演會が、日本のそのやうに、單に國內の聽講者ばかりを相手にせないて、外國人を歓迎する事が印象に残つたと云はれてゐる。

「大學教授及び學生々活」に於ては、英米獨等の大學教授の生活

振りや、學生の生活振りを説いてゐられる。頗る興味ある記事である。諸列強中殊に大戰の影響を受けた獨乙の悲惨な學生生活振りに對し、同情を禁じ得ぬ。

「ケンブリッヂでの日記から」に收む(一)チュートルの指導振に於て、博士は近世史の大家テンバレー教授の親切な指導振を説かれ(二)カレンツァの史學會に於て、ピーター・ハウスの史學會の狀況を書かれてゐる。興味ある一節を次に引用する。會場は學生の部屋で、會員の廻り持ちと見える。二十名ばかりの來會社が席に就くと、座長の印度人學生は開會を宣して、先づこれも學生の名譽書記に前回の會の記事を朗讀させ、それが済むと、議事に移つて一二の會務を議し、終つて愈テ氏(テンバレー教授)の十八世紀のフォーレン・ポリシーと題する講演が始まる。氏はやゝ巨驅を起して、舊稿らしい可なり手垢の跡の見える原稿を手にし乍ら朗讀された。もとよりお得意の題目ではあり、態度といひ内容といひ實に堂々たるものであつた。それが終ると、座長がテイスカツシオンを始めると宣言した。會員は待つてゐたと言はんばかりに交々起つて各自の意見を述べる。中にはまだ初心の顔を赤らめながら、早口の途切れ勝に述べるもあつたが、又悠揚迫らぬ態度で、美事に言つて退けるもあり、先生の講演中は黙つて謹聽したものが、今は學友の辯難攻撃を面白がつて、例の履踏み鳴らし乍ら聲援するさま、教室やチュートルの部屋での彼等の態度を知つて居る私に取つて異様の感がせななくてもなかつた。

併し彼等とはもとより専門研究に於て氏と太刀打の出来る筈もなから、其意見といつても、實は寧ろ常識から出た感想で、講

演の内容に觸れたものとしては殆どなかつた。例へばスピリット・オブ・ゼ・エーザの検討は一般歴史の研究に必要なことであつて、十六世紀の時代精神はセークスピアの脚本を通じて見らるべく、現代のそれはイフ・キンター、カムス（其頃ん盛に持離されて居つたハツチンソン）の中にも見られるのである。故に外交政策の問題を取扱ふに當つても、單なる事實の経過を説くに止めないで、其時代の文藝を通じて時代精神を知り、それが外交政策の上に如何に働いてゐるかを考案するの要があらう杯といふ意見を、アイ・ウキル・サツゼスト・ユウ杯と冒頭して、さも得意氣に語り出すのであつた。テ氏は答辯は皆の濟んだ後ですると言はれ乍ら、始終笑を含んで聞いて居られたが一巡言はせて置いて、夫丈かと確めた上、起つて滔々と懸河の辯をふるはれ、セークスピアの偉大を認めるのは、自分も敢て諸君に譲らないが、さりとてセークスピアを知られば、外交が談ぜられぬといふ道理が何處にある、と言つた調子が温顔に微笑を湛へ乍ら、尾々として説き去り説き來り、彼等の議論を完膚なき迄に辯駁されて、一同を首肯させられた」云々。ハツチンソン云々は少し極端とするも、彼の地の學生間に文化史的研究熱の勃興してゐることが明かに首肯される。

「ムツソリニー氏と語る」「スパイ」「書肆」「國民的信仰」等も極めて興味ある記事である。

尙本書には多くの有益なる圖版を收め、錦上更に花を添ふるの觀がある。

要するに本書は尋常一樣の見聞録と全く其の撰を異にし、われらは隨所に博士の卓見と蘊蓄とを感知し得る。博士に深く敬意を

表すると同時に、史學に志す者、歐米に遊學せんとする者、及び學校當事者に本書の一讀を切に薦む。（宮島貞亮）

もしほ草 江湖新聞

（小野秀雄校訂）
（明治文化研究會版）

明治時代の研究が、近來段々と、盛になりつゝあることは喜ぶべき事である。この時代の史料は、得易い様に思はるゝが、案外手に入り難いものが多いのである。特に、明治初期の新聞について、我々は、この感を深くするのである。即ち、小野氏が、この序文に於て言はれてゐる如く、新聞紙は散逸し易いので、これを蒐集することは、容易でなく、號を揃へんとすれば、幾度か重複號を、買はなければならぬので、その努力と失費は、非常なものである。又新聞紙が史料として、貴ばれることとなると、従來紙屑同様であつたものの市價が、急に昂騰し、書籍の數倍の賣價となり、五六十年以前の新聞が、珍本の如き觀を呈するのであつて、我々は、この爲に、その研究を防げらるゝばかりではなく、又一部の商人の犠牲とさへなるのである。此等の不便を除く爲に、明治文化研究會が、先づ第一に、この兩新聞を、複製された事は大に感謝しなければならぬ。

もしほ草と、江湖新聞は、共に慶應四年、横濱及び江戸で、創刊されたものである。勿論日刊ではなく、三日又は五日目位に、發行されたもので、その内容には論説あり、ニュースあり、廣告あり、不完全ではあるが、現代の新聞の内容を具備してゐた。然し共に關東の佐幕的輿論に、投合せんとするもので、京都、大阪に